



## 明治前半期の時順表現と時長表現

|      |   |
|------|---|
| 著者   | 松井 利彦   |
| 著者別名 | MATSUI Toshihiko  |
| 雑誌名  | 文林  |
| 巻    | 42  |
| ページ  | 19-57   |
| 発行年  | 2008-03-20  |
| URL  | <a href="http://doi.org/10.14946/00001579">http://doi.org/10.14946/00001579</a> |



# 明治前半期の時順表現と時長表現

松 井 利 彦

## (1)

《時》の表現のうち、現代と明治前半期とで大きく違うのは、時長表現である。なぜそうなのかと言え、時長表現には官製がなかったからである。そのために、「九十七時二十分間」という角書きをもつ小説が明治13年に出版されることになった。井上勤が Jules Verne の “De la terre à la lune, trajet direct en 97 heures” の英訳本を訳した空想科学小説、『月世界旅行』<sup>1)</sup> がそれである。第1巻の扉には書名のほか、「米国 ジュルスベルン<sup>(ママ)</sup>氏著／日本 井上勤訳」「版權免許 二書楼発兌」とある。ジュール・ベルヌを「米国」とした理由は凡例の第1項で次のように書いていることから判明する。

1, 此書ハ碩学「ジュルス、ベルン」氏ノ著書ニシテ米国チカゴ」府  
「ドンネリイ、ロイド」商会ノ発兌ニ係リ原名ヲ「フロム、ゼ、ア  
ス、ツー、ゼ、ムーン、イン、ナインチャーセブン、アハス、エンド、  
トウエンチャー、ミニューチス、」ト題セル所ノ書ナリ

シカゴで出版された英訳本を井上が訳したので、著者をアメリカ人とし、日本語訳の書名もその影響を受けることになった。本書の英訳名は “From the Earth to the Moon Direct in 97 Hours 20 Minutes” である。<sup>2)</sup> この “in 97 Hours 20 Minutes” に日本語の書名の角書きは対応する。しかし、「九十七時／二十分間」（内題も「九十七時／二十分間」。改

行を「／」で示す。) という時長は、現代日本語には存在しない。井上は書名について、凡例の第2項で「其題名ノ如キ冗長ナルヲ以テ約シテ (九十七時二十分間) 月世界旅行ト名ツク」と書いており、この場合は角書きではなく、カッコに入れて「(九十七時二十分間)」と書いているから誤植ではない。

井上は明治21年に本書の再版を出している。初版の漢字片仮名交じり文を漢字平仮名交じり文に改め、ルビも初版で付けなかったのを総ルビにした。しかし、書名に変更はない。表紙には、『九十七時／二十分間月世界旅行』と横書きし、その下に「日本井上勤訳述」と横書き、右端に縦書きで「東京聚栄堂蔵版」とある。内題も「九十七時／二十分間<sup>げつせかいりよかう</sup>月世界旅行」であり、その下に「米国 ジュールス、ベルン」「日本 井上勤訳述」とある。<sup>3)</sup> 凡例の第2項も「其題名の如<sup>そのだいめい</sup>き<sup>ごと</sup> 冗<sup>じやうちやう</sup> 長<sup>もつ</sup> なるを以て約<sup>やく</sup>して九十七時二十分間<sup>じふんかんげつ</sup>月世界旅行と名つく」であり、「九十七時二十分間」に变りはない。明治の前半期に「九十七時二十分間」が時長を表していたことは間違いない。

この「九十七時二十分間」が「九十七時間二十分」になる時期は何時か。hours (「時」<sup>ジ</sup> 単位の時長をこう呼ぶことにする。) には必ず「間」を付け (たとえば、「3 時間」)、minutes (「分」単位の時長をこう呼ぶことにする。) には「間」を付けることもあれば付けないこともあり (たとえば、「30分」、あるいは「42分間」)、「何時間」以上に付く minutes には「間」を付けることがない (たとえば、2 時間18分) という、アンバランスな表現は何時頃から行われているのか。どのような理由からか。

雑誌『太陽』<sup>4)</sup> を見ると、1925年では「一時間十五分」のような現代と同じ表現が多く見える。しかし、他に「十一時三十六分」が時長の表現として使われており、また「一時間十五分間」や、「一時間五十一分間」も

出てくる。僅かではあるけれども、これらが現れる。<sup>5)</sup> 1925年は大正14年であるから、時長の書き方が現代と同じになるのは、昭和になってからであると言ってよい。

それに比べると、時順表現の基本が確定するのは早かった。時順の表現は、明治5年の法令を承け、明治6年1月から実施されて、勿論、全国一斉に、とはいかなかったが、時長に比べると早く確立した。時順表現と時長表現とは同時の出発・進行ではない。その遅れをとった時長表現の成立を追うのが本稿のテーマである。

## (2)

明治6年以後の時順表現は官製である。明治5年11月に、『太政官日誌』第97号で次のように布告された。

2, 三、時刻之儀是迄昼夜長短ニ随ヒ十二時ニ相分チ候処今後改テ時辰儀時刻昼夜平分二十四時ニ定メ子刻ヨリ午刻迄ヲ十二時ニ分チ午前幾時ト称シ午刻ヨリ子刻迄ヲ十二時ニ分チ午後幾時ト称候事

四、時鐘之儀来ル一月一日ヨリ右時刻ニ可改事

但是迄時辰儀時刻ヲ何字ト唱来候処以後何時ト可称事

これは日本の《時》表現にとって画期的な法令であった。漢字と法令との関係においても先駆的な存在である。しかし、この法令には欠陥がある。このことについては、本誌四十号などに何度も書いたので詳しくは言わないが、法令の内容と欠陥を、新たな事柄を含めて簡単に言えば、次のようなことである。なお、ここで、条項を第三項と第四項としたのは、その前に太陽暦に関する項目があり、これらを仮に第一項、第二項としたため

ある。

さて、第三項であるが、明治5年までは、1日を12に分ける不定時法の12刻制や12<sup>とき</sup>時制を用いてきたが、今後は1日を24等分する、定時法の時制を採用すること（この時制を私は24時制と呼んでいる。この呼称の問題点については後で触れる。）、そして、子の刻から午の刻までを午前とし、午の刻から子の刻までを午後と言うこと、この2つが内容である。第四項では、最近では時刻を、たとえば、「7ジ」や「8ジ」を、「字」の文字で書くことが一般的になっているが、これを廃止すると言っている。「七時」「八時」を「ななつとき」「やつとき」と読まれることを避ける方便として「時」の代わりに「字」が広く使われた。今後は12時制を使用しないから、「何とき」と読まれることはなく、したがって、「時」の漢字を用いて「七時」「八時」と書くことにすると言うのである。「7ジ」「8ジ」の「ジ」に「時」を当てるのは、もともと蘭学者たちの時順の書き方である。第四項は蘭学者たちが使用していた、そして、その影響を受けた人たちの時順表示に戻すということである。以上が布告の内容である。

ただし、省略したことが1つある。第四項に「右時刻ニ可改事」とあるのは、この法令に12刻制と24時制とを対照させた表が掲載されていることを指す（表の中に「時」と書くべきところを「字」と書いているところがある。それほどに「字」が流布していた）。ここではそれを省略したが、「是迄時辰儀時刻ヲ何字ト唱来候処」と言うのであれば、対照表は12時制と24時制を並べるべきであった。12刻制が当時の正式の時制であるから、そして、第三項との関係で12刻制と24時制を並べたのであろうが、両者の対照からは、「字」のことは問題にならない。なお、ここに書いている「唱来候」と言うのは誤りで、「書く」、あるいは「記す」でないと、いけ

ない。

この法令が欠陥法令だと先ほど言ったのは、これらを除けば、次の2つのことが欠けているからである。1つは、上の三項と四項で示されているのは24時制の「時」単位までのことであり、「分」「秒」については触れていないことである。《時》に関する法令の公布された明治5年11月には、既に蒸気車が2度の仮営業を経て、新橋と横浜間の本営業が始まっている。そこでは、「分」の単位が必要であった。乗車する人は多くはなかったであろうけれども、必要な生活時順になっていた。「秒」単位については当時では日常生活において使用されることはなかったが、「分」単位は重要であった。その「分」単位への言及がない。これは欠陥である。

次の欠陥は、先ほども言ったが、この法令が時長表現にまったく触れていないことである。時長表現が放置されている。近代社会においては時長は極めて重要な概念である。労働にしても、学校生活にしても時間割で構成するには時順と同時に時長の概念が必要であった。また、能率・効率・性能・能力を示すにも、優劣を比較する基準としても、時長はなくてはならない尺度であった。その時長が置き去りにされた。

もっとも、時順表現にも、明治6年以後、問題がなかったわけではない。いわば純精24時制とも言うべき時制の施行の問題があった（今まで本稿で用いて来た「24時制」は実質は12<sup>ジ</sup>時制である。しかし、1日を24等分することにおいて24時制と呼んできた。今後もこの名称を使用する）。1日は0時から始まって、1時・2時・3時と進み、11時・12時、そして、次が13時・14時と進んで23時・24時で終わる。24時は同時に0時である。この純精24時制の採用があった。このことについて石井研堂は『明治事物起原』<sup>6)</sup>で次のように書いている。

3, 米国華盛頓府（ワシントン）において、明治十七年十月に開きし万国子午線會議にて、従来の計時法を廃し、午の前後の別なく、第一時より第二十四時までとなすことに議決されしが、十八年一月一日より、英国綠威（グリニッチ）の天文台にてはいよいよこれに改正せりといふ。今日にても、なほこの計時法を一般に実用化しようとの論絶えず、昭和十八年、わが国の鉄道、および陸海軍は内部にこれを実施す

万国子午線會議で明治17年（1884年）に純精24時制が決ったことはその通りである。しかし、日本での実施については、誤りがある。純精24時制が公式に日本で使用されたのは、昭和17年10月からである。この年（1942年）の6月17日の『朝日新聞』は、「汽車の時間表も／午前・午後を廃止／国鉄二十四時間制を採用」と見出しを書き、「鉄道省では今秋十月から実施される時刻改正を期して二十四時間<sup>(ママ)</sup>制を採用、午前午後の呼称を廃止することになった、」と報じている。そして、「すでに鮮満支および陸海軍において実施してゐるので事務聯絡の上にも非常に便利になる訳である」と書く。「その結果汽車時間表や旅客荷物の営業時間なども二十四時間<sup>(ママ)</sup>制による表示をすることになる」とあり、「なほ地方鉄道や軌道および自動車交通事業に関しても同様に実施される」と記している。一方、鉄道省は法律の改正を始めている。「鉄道省告示第二百十三号」には「鉄道部内ニ於ケル二十四時制実施ニ伴ヒ左ノ規定中改正シ昭和十七年十月十一日ヨリ之ヲ実施ス／昭和十七年九月二十六日／鉄道大臣 八田嘉明」、「昭和六年九月鉄道省告示第二百三十六号営業規則第三条中『午前八時ヨリ午後四時迄』ヲ『八時（午前八時）ヨリ十六時（午後四時）迄』ニ改メ」云々とある。また、「『午後十二時』ヲ『二十四時（午後十二時）』ニ改ム」とか、

「シベリア經由亜欧貨物連絡運送規則第五十四条中『午前零時』ヲ『零時(午前零時)』ニ改ム」(『法令全書16巻31』)とある。純精24時制を主体に書き、カッコの中に従来の午前・午後の時刻を書いている。過渡期であるので混乱を避ける書き方がなされている。

このように、時順表現にも、24時制と純精24時制との併用に関わる問題があった。しかし、これは昭和17年以降のことであって、明治前半期では24時制の時順の表示にあまり混乱はない。あえて言えば、「5時50分」と言うか「6時10分前」と言うか、または、「何時半」か「何時三十分」か、あるいは、「正午」と書くか、「午後零時」と書くか、「午前十二時」と書くか、いずれを使うかなどの問題がある。しかし、これらは以下で取り上げる時長表現と質的に異なる。

### (3)

明治前半期の時長表現がいかになる状態であったかを見るために次の資料を使用する。

- 4, 『新／説八十日間世界一周 前編』(「仏人 シュル、ウエルス<sup>(ママ)</sup>氏原著／日本 川島忠之助 訳」「明治十一年六月刊行」〔表紙による〕。「明治十一年五月三十一日版權免許」〔翻訳出版人 川島忠之助〕「売捌書林 丸家善七／山中市兵衛／慶應義塾出版社」〔奥付による〕。)  
「定価金四十銭」(朱印)〔扉による〕。<sup>7)</sup>

名著復刻全集本は表紙の色が濃い緑色であるが、架蔵本は灰色である。経年のための多少の変色はあるにしても、明らかに色調が異なる。しかし、本文に相違はないようである。本書を『新説』と略称することがある。

フランス語の原書は1873年(明治6年)刊。川島忠之助はフランス語版



を翻訳している。私が参照にした原書は“Bibliothèque D'éducation et de Récréation”の87版（刊年不明。Paris 刊）である。なお、本稿では原書の代わりに、鈴木啓二氏の訳本（『八十日間世界一周』平成16年・2006年4刷、岩波文庫）を使用し、必要に応じて原書を引用する。また、江口清氏訳の『八十日間世界一周』（昭和38年・1963年初版、平成16年・2004年10月改版初版、角川文庫）、木村庄三郎氏訳の『八十日間世界一周』（昭和48年・1973年2月初版、昭和53年・1978年12刷、旺文社文庫）、田辺貞之助氏訳の『八十日間世界一周』（昭和51年・1976年初版、平成16年・2004年10月19版、東京創元社文庫）を参照することがある。原書は第1回から第37回までの話から成る。川島訳でも同じである。ところが、川島訳には第31回に原作にない増補がある。Stephen W. White が英訳する<sup>8)</sup>ときに増補した箇所を川島は取り入れている。他は基本的にはフランス語の原書を訳しているが、増補部分以外でも White 訳を使っている所がある。これらのことは富田 仁氏の『ジュール・ヴェルヌと日本』（花林書房、1984年6月刊）や、『翻訳小説集 二』（「新日本古典文学大系 明治編15」、平成14年・2002年1月、岩波書店刊）所収の、岡照雄氏・清水孝純氏・中丸宣明氏による『八十日間世界一周』の校注、および解説で指摘されている。<sup>9)</sup>

- 5, 『新／説八十日間世界一周 後編』（仏人 ジェル、ヴェルヌ氏原著／日本 川島忠之助訳／明治十三年六月刊行〔表紙による〕。「明治十三年六月二十四日出版御届」「翻訳出版人 川島忠之助」「売捌書林 丸屋善七／山中市兵衛／慶應義塾出版社」「定価五十銭」（朱印）〔奥付による〕）。

表紙の色は薄い空色。表紙の「後編」が名著復刻全集では「後篇」。奥付は、「丸家」と「丸屋」の違いはあるが、他は前編と同じである。しか

し、実質は前編と後編に多少の相違がある。前編が川島の自費出版であるのに対して後編は慶應義塾出版社が引き受けたことが、表現・文章に多少の変化をもたらしたようである。前編にはルビがないが（外来語のルビが若干あるが、和語・漢語のルビはない）、後編はパラルビであることや、活用語尾を記すことが後編で多くなっていること、また、時長表現に若干、違いがあることなどは、読みやすさを考えて行われたと推定される。ただし、これが川島自身の自発的な行為であるのか、出版社の意向の反映であるのかは不明である。

6, 『通／俗八十日間世界一周』（「日本 井上勤訳」「東京自由閣梓」〔表紙による〕。<sup>10)</sup>「明治二十年七月四日版權免許／明治二十一年十月二十日印刷／明治二十一年十一月十七日出版」「訳述者 井上勤」「出版者 西村富太郎」「印刷者 江尻芳次郎」「発兌元 自由閣」〔奥付による〕。426ページ。漢字平仮名交じり文。総ルビ。<sup>11)</sup>

本書を『通俗』と略称することがある。また、『新説』の前編（第1回から第19回まで）と後編（第20回から第37回まで）とに対応させて、『通俗』についても、『新説』の前編、あるいは後編に当たる部分といった呼び方をすることがある。

井上訳にも、川島訳と同様に、Stephen W. White の増補した部分がある。したがって、井上が Stephen W. White の英訳本を訳したと考えるのが自然である（井上がジュール・ヴェルヌの小説を英訳本で訳していることは既に見た）。ところが、George M. Towle が英訳した“The Tour of the World in Eighty Days”（1875年・明治8年にボストンの「James R. Osgood And Company」から刊行された袖珍本）を参照した形跡がある。そのことが次の①から⑤の関係で分かる。

i ① <sup>パスセパルトゥー</sup>潑世巴兒通の身上を尋ぬるに此は仏都巴里斯府の府民にして已に  
自国を立ち出で、英国に來りし以來所々人の從僕<sup>めしつかひ</sup>に住み込み自  
分の心に<sup>かな</sup>協ひし主人はあらずやと頻りに所々方々之を尋ねれども  
未だ左る主人に出逢ひし事なく常に嘆息したりけり（『通俗』  
13p）

②As for Passepartout, he was a true Parisian of Paris. Since he  
had abandoned his own country for England, taking service as  
a valet, he had in vain searched for a master after his own  
heart. (George M. Towle 本22p.)

③As for Jean, called Passepartout, a true Parisian of Paris, he  
had sought vainly for a master to whom he could attach him-  
self, in the five years that he lived in England and served as a  
valet in London. (Stephen W. White 本39p.)

④Quant à Jean, dit Passepartout, un vrai Parisien de Paris,  
depuis cinq ans qu'il habitait l'Angleterre et y faisait à  
Londres le métier de valet de chambre, il avait cherché  
vainement un maître auquel il pût s'attacher. (原書10p. 鈴木  
啓二訳「パスパルトゥーの名で呼ばれるジャンはといえば、彼は  
生粋のパリジャンであった。五年前から英国に住み、ロンドンで  
召使の仕事をして、我が身を捧げることのできそうな主人を探し  
たが見つけることはできなかった。」20p)

⑤パスパルトゥーノ綽名アルジャンノ如キハ是レ純然タル巴里兒ニシ  
テ嘗テ英国へ來寓シ龍動ニ於テ家僕ノ職ヲ執ルコト五年其間適意  
ノ良主ヲ索メテ未タ之ヲ得ズ（『新説』上編12p）

④の原書（鈴木訳も同じ）と、③の White 訳を比べると、後者に “As for Jean” と “in the five years” があり、適切に英訳されている（波線部分。以下でも問題のある箇所には波線を付す）。ところが、②の Towle 本には④の “Quant à Jean” と “depuis cinq ans” が英訳されていない。そして、①の『通俗』にも、これらに対応する訳語がない。このことから、①の『通俗』は②の Towle 本を訳していると推定される。

ii ①今日十月九日金曜日「スエス」の到着を手帳に時日<sup>(ママ)</sup>の記入し  
（『通俗』62p）

②On this Friday, October 9 th, he noted his arrival at Suez, and  
observed that he had as yet neither gained nor lost. (George  
M. Towle 本53p.)

③He noted down then this day, Wednesday October 9, his arri-  
val at Sues, which agreeing with the stipulated arrival, neither  
made a gain nor a loss (Stephen W. White 本49p)

④Il inscrivit donc, ce jour-là, mercredi 9 octobre, son arrivè à  
Suez, (原書45p。鈴木訳「かくしてフオッグ氏はこの日一〇月九  
日水曜日にも、その旅程表にスエズへの到着を書き入れたのだっ  
た。」70p)

⑤フヲッグハ今日モ亦例ノ如ク此冊子ヘ十月九日水曜日ヲ以テ定規  
ノ時間ニスエズ港ヘ到着シ結局損得共ニナカリシ条ヲ筆記シケル  
（『新説』上編58p）

④の原書の曜日は “mercredi”（水曜日）であり、⑤の『新説』でも「水曜日」である。③の White の英訳でも “Wednesday” である。ところが、②の Towle の英訳では “Friday” とあり、『通俗』でも「金曜日」で

ある。『通俗』は③の Towle の英訳本を訳したと推定してよいであろう。

- iii ①午後一時船は埠頭に着きければ船客は皆な上陸せり (『通俗』198p)
- ②At one o'clock the Rangoon was at the quay, and the passengers were going ashore. (George M. Towle 本137p)
- ③In an hour the Rangoon was at the wharf, and the passengers landed. (Stephen W. White 本74p)
- ④A une heure, le Rangoon était à quai, et les passagers débarquaient. (原書138p。鈴木訳「一時にラングーン号は埠頭に着いた。そして乗客たちは船を降りた。」207p)
- ⑤一時間程過ケル頃「ラングウン」号ハ蚤ヤ波止場ノ側へ着シ船客各陸へ上リケル。(『新説』前編183p)

『新説』の「一時間」は④を訳したとするならば、誤訳である。『翻訳小説集 二』の脚注にも、「原文は『午後一時に』」と書き、原書と訳語の違いを指摘している (130p)。しかし、川島は原書を誤訳したのではなく、White 本を訳したのかも知れない。その可能性はある。一方、井上が訳したのは②の Towle 本であろう。ただし、White 本以外の英訳本は Towle 本だけではなかったかも知れない。そうすると、『通俗』の翻訳が White 本と一致しない場合、Towle 本に依っていると断言できなくなる。Towle 本以外の英訳本を訳していることもあり得る。そこで、本稿では Towle 本を、White 本以外の諸本の代表として扱うことにする。

なお、井上勤は、英訳本の第31回と第32回を合せている。したがって、『通俗』の第32回以後は『新説』(あるいは原書や英訳本)の第33回以後に該当する。

井上は、川島訳の前編（第1回から第19回まで）に当たる部分は英訳本を独自に訳しているようで、『新説』の語句・文章と離れているが、川島訳の後編（第20回から第37回まで）に該当する辺は川島訳に基づくことが多かったようで、川島訳の語句・文章との差が小さくなる。たとえば、第30回に次のような箇所がある。

此時既に午後二時に垂<sup>なんな</sup>んとし降雪は霏々として中天を蔽ひ折柄汽笛数声東に聞ゑて此方を指して来る者あり（『通俗』344p）

此時既ニ午後二時ニ垂<sup>ナンナ</sup>ントシ降雪ハ霏々トシテ中天ヲ没セリ忽チ汽笛数声東ニ聞エ此方ヲ指シテ進ミ来ル者アリ（『新説』後編128p）

両者はほとんど同文である。『新説』は次のフランス語を訳したはずである。

En effet, vers deux heures après midi, pendant que la neige tombait à gros flocons, on entendit de longs sifflets qui venaient de l'est. (253p)。鈴木訳「午後の二時頃、大きな雪片が降りしきる中、東の方から長い汽笛の音が聞こえてきた。」(373p)

『新説』は適訳と言える。ところが、Towle 訳と White 訳は次のようになっている。

Towards two o'clock in the afternoon, while it was snowing hard, long whistles were heard approaching from the east. (George M. Towle 本243p)

About two o'clock in the afternoon, while the snow was falling in large flakes, long whistles were heard coming from the east. (Stephen W. White 本106p)

『新説』と『通説』の訳文は、“large flakes”があるだけ、Towle 本よ

りは White 本に近い。しかし、井上勤が White 本を訳したにしても、その文飾が上のように『新説』とほとんど同じになることはあり得ない。また、次のような一致もある。『通俗』に「失敬ながら諸君朝飯を喫し玉はんとならば猶ほ十分間の猶予候ぞ」(362p) とある「十分間」は、White が第30回で増補した箇所であり、原文は “Pardon me. If you desire breakfast there is plenty of time” (110p) である。したがって、“plenty” の訳としては誤りである。ところが、『新説』でも、「失礼ナカラ諸君朝飯ヲ喫シ玉ハントナラバ猶ホ十分間ノ猶予候」(後編145p) である。『通俗』が『新説』を承けていることは否定できない。

表記についても、『通俗』が『新説』と、後編で緊密であることが指摘できる。『通俗』は「ロンドン」を前半で「倫頓」と書く。ところが、後半では「龍動」に変わる。「龍動」は『新説』が一貫して使用する表記である。『通俗』が後半で『新説』に依存していることは、『時』表現を考察するとき配慮しなければならない。

(4)

明治10年頃の時長表現が現代と違うことは『月世界旅行』で垣間見た。『新／説八十日間世界一周』では時長表現の型は次のごとくである(例文の固有名詞に底本では単線と複線が使われているが、複線は時長を表す語に付けたので、すべて単線に改めた。)

7、アラハバツドヨリ行程僅カニ八十里ナルヲ以テ貳時ニシテ達スルヲ得タリ (前編136p)

8、今朝第七時ヨリ来ル二十一日午後八時四十五分迄ニ贏<sup>マ</sup>ス所ハ僅ニ九日ト十三時四十五分ノミ (後編160p)。

- 9, 衆客ハ皆快ク飽食シテ費羅特比府迄百五里間ノ長路ヲ三時三十五分間ニ一走スルモ能ク之ニ耐ヘント用意セリ (後編155p)。
- 10, 然ラハ其象ヲ見ニコソ参ルベシト云テ頓テ五分時間モ過ケル頃〈中略〉三人ハ早ヤ一軒ノ矮屋ノ側ニ (前編100p)。
- 11, 星学家ノ用ル時辰器ノ揺スト一般ナル定歩一秒時ニ一足ヲ進メツ、 (上編80p)。
- 12, 君ハ龍動ノ時ニ合セ其俣打置キ玉フ故当スエズ港時トハ凡ソ貳時間ノ差ヲ生ゼシナリ (前編60p・61p)。
- 13, 我カ曾祖父ヨリ一家伝来セシ珍器ニテ一年ニ差フ処僅ニ五分ニ過ぎキズ (前編60p)
- 14, 旅客蕃賊互ニ奮闘スルコト既ニ十分間ニ及ヘトモ勝敗未タ決セス (後編120p)。
- 15, 頑固ニモ先祖伝来ノ時器ヲ龍動ノ「クロノメートル」ト一秒〔イツセコンド (左ルビ)〕ノ差ダニナカリケレバ (後編57p)。
- 16, 機関ノ運転一秒間ニ二十回ニ達シ其速力ハ凡ソ一時間ニ百里ノ余ヲモ走ルベク (後編108p)。

例文7は「何時」が時長を表す例である(「何時」は「十何時」「何十時」をも表す代表形として使用する。以下でも同じ。)。現代の「何時間」に当る。例文8は「何時何分」(「何分」は「何十分」「十何分」をも表す代表形として使用する。以下でも同じ)が時長を表す例であり、現代の「何時間何分」と同じである。例文7と例文8は時順がそのまま時長を表す例である。例文9は「何時何分間」で時長を表す場合であり、『月世界旅行』の角書きと同じである。時順に「間」を付けて時長を表す。現代ならば、「何時間何分」と言うところである。例文10は時長を表す「何分時」に



「間」を付けたものである。当時は「何分」が、割合などを言うのではなく、時長を表すことを明らかに示すために次のごとく「時」を付けることがあった。

- 17, 十分時ニテ汗出テ背ヲ浹ス、亦其勞スルコトヲ知ラレタリ、二十分  
時ノ間ニ、五分時ノ休ヲ与フ、苦役ハ二十分時二十五分時ツ、ノ割  
ナリ、(久米邦武編『特命全權大使米欧回覧実記 2』168p。明治5年  
9月3日)。<sup>12)</sup>

- 18, 私<sup>わたくし</sup>儕も心が急ぎますから成るべく簡短に申しますさて御身<sup>あなた ウンゲード</sup>が雲霓土  
を去りし跡<sup>ありさま</sup>の光景を語るに一分時又二人<sup>ふたり</sup>の伝言<sup>ことづけ</sup>を語るに二分時総て  
三分時<sup>さんぶんじ</sup>で吾<sup>わ</sup>が用事は足ります (井上勤訳『政治ノ小説妻の嘆』236p、  
明治20年8月発行)

『新説』には、この「何分時」が見られず、これに「間」を付けた「何分時間」が使われている。

例文11は「何秒」に「時」を付けて時長を表した例である。当時は、「何秒時」に「間」を付けた「何秒時間」も使われた。

- 19, 「ビスコイト」ノ形状一ナラス、其器モ亦一ナラス、或ハ大仕掛ヲ  
ナシテ、蒸気力ヲ以テ、一度ニ数十ヲキリ、〈中略〉焙鑪ノ仕掛種種  
アリ 〈中略〉徐徐トシテ鑪口ニ回り入レハ、其一方ハ又徐徐ト鑪尾へ  
回り出テ、下ニ向ヒ回りサル、約六秒時間ニ一寸半進ム、一分時ニテ  
丈五尺ヲ進ミ入ルナリ、(久米邦武編『特命全權大使米欧回覧実記 2』  
371p・372p。明治5年10月25日の項。ビスケットの自動製造器につ  
いての説明)。<sup>13)</sup>

- 20, 地上ニ伏シ転ビ爪モテ我ト我ガ体ヲ搔キ傷リ朱ニ染リテ悶ルヲ見テ  
笑ヒツ、「猶二三秒時間ノ辛抱ニテ其後ハ醒メス睡ニ就カルレバ少シ

忍ンテ待タレヨト」(川島忠之助訳『虚無党退治奇談』198p・199p。

明治15年9月刊)

「何秒時間」は『新説』で使用されない。しかし、川島忠之助は上に示したように『虚無党退治奇談』で正在している。

例文7から例文11までと、例文17から例文20までの時長表現の型は現代では使用されず、例文12から例文16までは現代でも使用される型である。『新説』ではこれらが混用される。その分布を示したのが次節の表である。

## (5)

下の表では、『新説』を前編と後編に分け、時長表現のタイプを、時順表現をそのまま用いる「時順借用」型と、時順表現に「間」を付ける「時順+間」型に分けて示した。

『新／説八十日間世界一周』の時長表現

| 時長表現の型<br>時順の種類 | 前 編      |          | 後 編      |          |
|-----------------|----------|----------|----------|----------|
|                 | 時順<br>借用 | 時順<br>+間 | 時順<br>借用 | 時順<br>+間 |
| 半時              | 1        | 2        | 1        | 1        |
| 一時              | 0        | 7        | 2        | 1 0      |
| 二時              | 2        | 2        | 0        | 1        |
| 二三時             | 0        | 0        | 1        | 2        |
| 両三時             | 1        | 0        | 0        | 0        |
| 三時              | 0        | 0        | 2        | 2        |
| 三時三十五分          | 0        | 0        | 0        | 1        |
| 三時四十分           | 0        | 0        | 1        | 0        |
| 四時              | 1        | 0        | 0        | 0        |
| 数時              | 2        | 1        | 0        | 4        |
| 五時              | 0        | 1        | 0        | 1        |
| 五時三十分           | 0        | 0        | 0        | 1        |

文林 四十二号

|         |      |      |      |      |
|---------|------|------|------|------|
| 六時      | 0    | 0    | 0    | 3    |
| 八時      | 0    | 0    | 1    | 0    |
| 九時五分    | 0    | 0    | 1    | 0    |
| 十時      | 0    | 1    | 0    | 0    |
| 十二時     | 1    | 1    | 2    | 2    |
| 十三時四十五分 | 0    | 0    | 1    | 0    |
| 十五時     | 0    | 2    | 0    | 0    |
| 十六時     | 0    | 1    | 0    | 1    |
| 二十時     | 0    | 2    | 0    | 2    |
| 二十四時    | 5    | 3    | 0    | 4    |
| 二十五時    | 0    | 0    | 1    | 0    |
| 四十八時    | 0    | 1    | 1    | 0    |
| 九十六時    | 0    | 0    | 0    | 1    |
| 百三十八時   | 0    | 1    | 0    | 0    |
| 百五十八時半  | 1    | 0    | 0    | 0    |
| 百六十八時   | 0    | 1    | 0    | 0    |
| 千九百二十時  | 0    | 1    | 0    | 1    |
| 何時      | 0    | 1    | 0    | 0    |
|         | 小計13 | 小計28 | 小計15 | 小計37 |
| 一分      | 0    | 0    | 0    | 1    |
| 二分      | 0    | 0    | 1    | 0    |
| 二分時     | 0    | 1    | 0    | 1    |
| 三分時     | 0    | 0    | 0    | 1    |
| 四分      | 2    | 0    | 2    | 0    |
| 数分      | 1    | 0    | 0    | 0    |
| 五分      | 1    | 0    | 1    | 2    |
| 五分時     | 0    | 1    | 0    | 0    |
| 十分      | 2    | 0    | 0    | 5    |
| 十五分     | 0    | 0    | 0    | 1    |
| 十五分時    | 0    | 1    | 0    | 0    |
| 二十分     | 1    | 0    | 3    | 1    |
| 三十五分    | 0    | 0    | 1    | 0    |
| 四十五分    | 0    | 0    | 2    | 0    |

明治前半期の時順表現と時長表現

|           |      |      |      |      |
|-----------|------|------|------|------|
| 十一万五千二百分時 | 0    | 1    | 0    | 0    |
|           | 小計7  | 小計 4 | 小計10 | 小計12 |
| 一秒        | 0    | 0    | 2    | 1    |
| 一秒時       | 1    | 0    | 0    | 0    |
|           | 小計 1 | 小計 0 | 小計 2 | 小計 1 |
| 合計        | 2 1  | 3 2  | 2 7  | 5 0  |

合計 1 3 0

備考

\*1 「貳」を「二」に、「拾」を「十」に改めて記した。

\*2 「数時」と「何分時」を便宜上、時順として配列した。

『新説』での時長表現は、「時順借用」型と「時順+間」型が、前編で21対32であり、後者の「間」を付けた型がほぼ60パーセントを占める。また、後編では、「時順借用」型と「時順+間」型とは27対50で、「時順+間」型がほぼ65パーセントである。前編と後編はほぼ同率である。明治10年頃には、時長表現に、時順表現をそのまま使うことが40%近くあったということになる。しかし、これは hours（「時」<sup>ジ</sup> 単位の時長）と minutes（「分」単位の時長）、seconds（「秒」単位の時長）を合わせた場合である。これらを分けて取り上げると、やや違った結果になる（「秒」単位は使用数が僅かなので考察の対象から外す。）。

hours の場合に限ると、前編では「時順借用」型と「時順+間」型は13対28であり、「時順+間」型が約68パーセントである。また、後編では「時順借用」型が15例、「時順+間」型が37例であり、「時順+間」型の割合は71パーセントであって、前編・後編とも、「時順+間」が約70パーセントを占める。現代の時長表現に近くなる。しかし、まだ「時順借用」型が約30パーセントある。それでは、『通俗』ではどうかと言え、たとえば、例文7に該当する所は「此れより二時間を過ぎて汽車は『アラハバツト』より八十英里の処に來りし頃」（149p・150p）であり、「時順+間」

型である。『通俗』では「時順+間」型の多いことが予測される。

一方、「分」単位の場合は、前編で「時順借用」型が7例、「時順+間」型が4例であり、「間」の付く型は全体の36パーセントに過ぎない。後編では、「時順借用」型と「時順+間」型とは、10対12であって、「間」付き型が約55パーセントである。前編と後編とで「間」を付ける率に差があるが、hours の場合に比べると、「間」を付ける割合が少ない。それにもかかわらず、現代の minutes の表現に比べると、『新説』の minutes での「間」付けは多いという印象を受ける。たとえば、例文14の「既ニ十分間ニ及ヘトモ」は現代では「十分」と言うのが普通ではないか。ただし、『通俗』では「既に十分間に及べども」(335p)である。現代語訳でも江口訳は「すでに十分間もつづいていた」(273p)である。しかし、田辺訳では「もう十分もつづいているが、」(293p)であり、木村訳でも「すでに十分以上つづいていたが、」(273p)、鈴木訳も「既に一〇分以上も続いていて」(362p)であって、現代語訳では「十分」が多い。原書では“durait déjà depuis dix minutes” (246p)であり、英語訳では White 本が“had lasted already for ten minutes” (104p)、Towle 本が“had lasted for ten minutes” (236p)である。日本語として「時順借用」型で訳すか、「時順+間」型で訳すかの情報は、これらフランス語や英語からは得られない。いずれに訳すかは日本語の問題であり、単純に「十分間」と「十分」だけを比較することは許されないが、この場合について言えば、現代では「間」を付けないほうに傾いていると言ってよい。

hours については、例文7に限れば、『新説』と『通俗』は異なった型の時長表現を用い、『通俗』と現代語で同じ時長表現の型を用いる。ところが、例文12では『通俗』に「倫頓の時間は『スエス』の時間と二時<sup>おく</sup>も晩

れ居り候」(65p)とあるから、『新説』と『通俗』で時長表現の型が違い、現代と同じ時長表現の型を使うのは『新説』であるということになる。このように現代語との関係が『新説』と『通俗』で逆の場合がある。

minutes について見ると、例文14では『新説』と『通俗』の時長表現の型が同じで、これらと現代語訳とでは型が異なることがある。このことは先ほど見た。しかし、他の所では『新説』と『通俗』で違うことがある(ここでは用例を挙げることを控え、後に示す。)から、これらの時長表現の型の関係は一概には言えない。そこで、『新説』と『通俗』、そして、現代語訳での「間」の使用状況について具体例を検討し、「間」の付加傾向を見ることにする。すなわち、次の2点について確認する。

I、hours の場合、『新説』における「時順+間」型が約70パーセントに止まっている。『通俗』でも同じか。言うまでもなく現代では100パーセントが「時順+間」型である。

II、minutes の場合、『新説』における「時順+間」型のパーセンテージが前編と後編で異なるけれども、全体的には、hours の場合より少ない。『通俗』でも同じか。『新説』と『通俗』では現代語と比べると、「間」を付けることが多い印象を受ける。事実はどうか。

## (6)

I と II では、現代語と比べると、「間」の使用量が逆である。なぜそうなるのかを考える。そのために、若干例について、『新／説八十日間世界一周』と『通／俗八十日間世界一周』、および鈴木訳を対照する。時には江口訳・田辺訳・木村訳も使用する。必要に応じて原書や英語訳を参照する。

『新説』と『通俗』の時長表現を、その異同関係によって、そして、現代語訳の時長表現との関係を加味して、示すならば、次のようになる。

- 21、出帆セシヨリ凡ソ一時<sup>バカリ</sup>可ヲ経テ「ヘンリエッタ」号ハハドソン河口の標準ナル灯明台ヲ打チ過ギ（後編165p）。

『通俗』「出帆せしより凡そ一時許を経て」（383p）。鈴木訳「その一時間後蒸気船ヘンリエッタ号は<中略>岬をまわって海に出た。」（404p）。

- 22、龍動へ来着セシヨリ凡ソ二十五時ヲ過キシ頃主人ノ命ヲ奉シテ（後編202p）。

『通俗』「龍動に到着せしより凡そ二十五時を過ぎし頃」（420p）。鈴木訳「二五時間経った夜の」（447p）。

- 23、機関車ハ煤水〔セキタンミヅ〕ヲ十分ニ貯ヘ疾駆シテ途上更ニ車ヲ停ムルコトナカリケレバ厘ニ三時四十分ニ里程百三十二里ヲ過キ（後編154p。〔 〕の中は左ルビである。）。

『通俗』「僅かに三時四十分に百三拾二里の里程を過ぎ」（372p）。31回の増補部分。したがって、鈴木訳はないが、あるとすれば、「三時間四十分」である。

- 24、非常ノ障<sup>シヤウガイ</sup>碍ナキ時ハ五時三十分間ニ通過スルハ固ヨリ難キニアラズト雖トモ（後編185p）。

『通俗』「五時三拾分間に通過するは」（403p）。鈴木訳「リヴァプールとロンドン間の距離は五時間半で走り抜ける必要があった。」（427p）、田辺訳「五時間三十分で走らなければならなかった。」（341p）。

- 25、「然リ出帆ニ先タツコト十二時間ノ筈ナリキ「然ラハ今後ル、コト

已ニ二十時間ナリ然リナガラ十二時ノ先進アルニヨリ之ヲ差引クト  
キハ真箇<sup>マコト</sup>ノ遅滞ハ八時ナリ（後編134p・135p）。

『通俗』「左様出帆に先だつこと十二時間の筈に候」「然らば今後  
るゝこと已に二十時間なり然りながら元来十二時間早く此地に着せ  
しを以て之を差引ときは真箇の遅滞は僅かに八時間なり」（351p。  
会話であるが、話し手の名前を省略した）。鈴木訳「ええ、客船の  
出発時刻よりも一二時間早く着いていたはずですよ」「わかりました。  
ということは予定より二〇時間遅れているということですね。そし  
て二〇時間と一二時間の差は八時間だ。」（382p）。

- 26、其熟睡ノ体ヲ看テ徐<sup>シツ</sup>カニ之ヲ奥ノ方ナル寢床ノ上ヘ移シ臥サシメシ  
ニ三時<sup>ベカリ</sup>可<sup>ベカリ</sup>リノ間ハ人事ヲモ知ラス昏睡セシガ（後編28p）。

『通俗』三時間計の間は全く人事を覚えず」（241p）。鈴木訳  
「三時間後<中略>目を覚まして麻薬による麻痺作用と闘った。」  
（257p）。

- 27、二十四時ノ其間憂悶焦ルカ如ク狂気ノ如クニナツテ停車場ニ見張り  
居シガ（前編150p）。

『通俗』「停車場を徘徊すること二十四時間に及びしが今朝待ち  
兼ねたる主従が」（164p）。鈴木訳「二四時間の間、えも言えぬ不  
安の中で」（171p）。

- 28、此数時ノ遅延ハ予メフツグカ表上ニ記スル所ナレバ更ニ氏ノ行旅  
ニ害アラズ（前編74p）。

『通俗』「四時間を費さざるべからず」（79p）。鈴木訳「四時間  
を<中略>停泊する必要があった。」（88p）。原書は“quatre  
heures”（57p）、英訳本は両本とも“four hours”。



29、君ハ龍動ノ時ニ合セ其俣打置キ玉フ故当スエズ港時トハ凡ソ貳時間ノ差ヲ生ゼシナリ（前編60p・61p）。

『通俗』『スエス』の時間と二時も<sup>おく</sup>遅れ居り」（65p）。鈴木訳「二時間遅れの」（73p）。

30、拙者ガ八十日間則チ千九百貳拾時間乃チ拾一万五千貳百分時間已内ニ地球ヲ一周ナシ得ズト云フ人ニ対シ（前編29p）。

『通俗』『千九百二十時十一万五千二百分に世界の一周を誤るときは」（31p）。鈴木訳「一九二〇時間で、一一万五〇〇〇分で、」（37p）。

以上の、hours が関係する時長表現について、『新説』と『通俗』を見ると、同型が使用される場合と、違う型が使われる場合とがある。例文21から例文23では『新説』『通俗』ともに「時順借用」型である。例文24では『新説』『通俗』ともに「何時何分間」の「時順+間」型である。例文25では、前半の2例は「何時間」の「時順+間」型で、『新説』と『通俗』とで共通し、後半の2例は『新説』で「時順借用」型が使われ、『通俗』で「時順+間」型が用いられている。例文26と例文27では、『新説』で「時順借用」型が使われ、『通俗』で「時順+間」型が使用される。例文28は前掲の表の備考で記したように「数時」は時順ではないが、『新説』で「数時」、『通俗』で「四時間」（「数時間」に該当。）の対応をするので取り上げた。前者の「数時」は意識である。例文29と例文30は『新説』で「時順+間」型が、『通俗』で「時順借用」型が使われる場合である。これら2例の時長表現は、例文26・例文27における『新説』と『通俗』の時長表現の対応から見ると、時長表現の型が逆である。しかし、このような関係はこれら以外にない。

『新説』と『通俗』の時長表現の全体について、先ずその型の関係を言えば、両者で、同型が使用されることが多いのは「時順+間」型であり、相違が目立つのは『新説』で「時順借用」型、『通俗』で「時順+間」型の場合である。具体例に則して言えば、次のようである。

『新説』前編の「時順+間」型が『通俗』においても使用されるのは28例中25例である。例外は、『新説』の「一時間」が『通俗』で対応しないことが1例あるのと、『新説』の「郵船出発時限ノ数時間縮リシヲ」(前編193p)が『通俗』において「出帆の時刻縮りし由を」(206p)であるのと、『新説』の「半時間」が『通俗』で「半時<sup>とき</sup>」となっている3例である。「半時」は原文で“une demi-heure”(17p)であるから「30分」が正しい。したがって、「ハンジ」でなければならず、『通俗』のルビは間違いである。『新説』後編の「時順+間」型が『通俗』でも使われるのは、37例中34である。例外は『新説』の「一時間」が『通俗』で対応しないことが1例あるのと、例文29と例文30で見た関係の2例に過ぎない。『新説』の「時順+間」型のほとんどが『通俗』でも「時順+間」型で使用される。

ところが、「時順借用」型では、『新説』前編の13例中11例が『通俗』では「時順+間」型で用いられる。例外は『新説』の「二十四時間」が『通俗』で「一日中」、『新説』の「百五拾八時半」が『通俗』で「百五十八時二分の一」になっているだけである。後編では15例中9例が『通俗』で「時順+間」型が使われている。例外は、『新説』の「半時」が『通俗』で「はんとき」とルビが付いているのと、「三十四分」「九時五分」「十三時四十五分」「二十五時」「四十八時」が『通俗』でも「時順借用」型であるとの6例である。『新説』の後編で、『通俗』と一致、ないし類似することが多いのは時長表現に限らない。このことは第3節で指摘した。

結論を繰り返せば、『新説』と『通俗』を、「時」<sup>ジ</sup>単位の時長（hours）が関わる表現について比較すると、後者で「時順+間」型の使用の多いことが認められ、『新説』の時長表現は明治前半期の標準ではないということになる。

次に「分」単位の時長（minutes）について、『新説』と『通俗』の関係を見る。同時に現代語訳との比較をする。

- 31、何トテ我カ時計ノ錯ルベキ是ハ苟モ我カ曾祖父ヨリ一家伝来セシ珍器ニテ一年ニ差フ処僅ニ五分ニ過ギズ（上編60p）。

『通俗』「余程善き時計に候其れ故一年に僅か五分の差が出来候位にて」（64p）、鈴木訳「一年に五分の狂いだってありません。」（73p）、木村訳「五分しか」（62p）、田辺訳「五分とちがわない」（68p）、江口訳「五分しか」（61p・62p）。

- 32、其帰ルヲ待ツコト凡ソ二十分余ニシテ終ニ之ニ面会シ（後編202p）

『通俗』「其の帰るを待つこと凡そ二十分余にして終いに長老に面会し」（421p）、鈴木訳「そして実際、彼は少なくともたっぷり二〇分は待った」（447p）、江口訳「すくなくとも、二十分はたしかに待ただろう」（336p）、木村訳「たっぷり二十分は待った。」（335p）、田辺訳「たっぷり二十分は待った。」（358p）。

- 33、林を出て十分斗りにして小川の畔ニ至リ（上編120p）。

『通俗』「十分計りにして樹枝を潜りつつ」（129p）。鈴木訳「小枝の下を匍匐で一〇分すすんだところで彼らは、とある小川のほとりにたどり着いた。」（137p）、江口訳「十分ほど枝葉の下を這って」（109p）、田辺訳「十分ほど小枝の下を這って」（119p）、木村訳「十分間ばかり這って行くと、小さな川のふちに出た。」（111p）。

- 34、フラッグハ百折屈セズ世界一周ノ功ヲ畢リシガ不幸ニシテ厶カニ五分間ノ遅着ナルニヨリ終ニ其勝算ヲ失ヘリ（後編186p）。

『通俗』「五分間延着したるにより」（403p）、江口訳「五分間遅れて到着した。」（321p）、鈴木訳「世界一周の旅を成し遂げたあと、五分遅れで到着したのだった。」（427p）。田辺訳「五分おくれたのだった。」（342p）、木村訳「ただし、五分後れた。」（320p）。原書“arrivait avec un retard de cinq minutes !”（290p）、White 本“arrived five minutes behind time !”（119p）、Towle 本“was behindhand five minutes.”（274p）。

- 35、此次ノ停車場ニテ<sup>(ママ)</sup>一時間以内ニ達スヘシ其上汽車彼処ニ至リナハ十分間ハ留ルヘシ十分間ノ時アラハ決<sup>ハタシテ</sup>闘スルニハ余リアリ（後編115p）。

『通俗』「十分間は留るべし十分間の時間あらば決闘するには十分の時間」（330p）。木村訳「そこで汽車は十分間停車する。十分間あれば、ピストルの撃ち合いにはじゅうぶんだ」（269p）。鈴木訳「そこに一〇分間停車する。一〇分あれば銃の撃ち合いぐらいできるだろう」（357p）。江口訳「その駅で、十分間停車する。十分あれば、存分に拳銃を撃ちあうことができるさ。」（269p）。田辺訳「十分とまるだろう。十分ありゃ、ピストルの射ち合いができる。」（287p）。原書は“Le train y sera dans une heure. Il y stationnera dix minutes. En dix minutes”（242p）、White 本は“It will stop ten minutes. In ten minutes we can exchange a few shots with our revolvers.”（103p）、Towle 本は“The train will be there in an hour, and will stop there ten minutes. In ten minutes,”（233p）。

- 36、旅客蕃賊互ニ奮闘スルコト既ニ十分間ニ及ヘトモ勝敗未タ決セス  
(後編120p)。

『通俗』「既ニ十分間に及べども勝敗未だ決せず」(335p)。江口  
訳「戦闘はすでに十分間も続いている。」(273p)。鈴木訳「戦いは  
既に一〇分以上も続いている」(362p)。木村訳「すでに十分以上  
つづいていた。」(273p)。田辺訳「もう十分もつづいているが」  
(293p)。

- 37、諸君ヨ是ヨリ僅ニ二十分間ヲ出ズシテ我等トフヒリイスフラッグ氏  
ノ間ニ結ビシ誓約ノ期限ハ切レ候ゾ (後編198p)。

『通俗』「是より僅に二十分間を出ずして我等とフヒリヤスフラッグ氏  
との間に結びたる賭の期限は切れ候ぞ」(416p)。鈴木訳「あと二  
〇分でフィリアス・フォッグ氏と我々との間で約束した刻限となり  
ます」(441p)・江口訳「あと二〇分すると、いよいよフィリアス・  
フォッグ氏と、われわれとのあいだに結ばれた契約期限は切れます  
な」(332p)、田辺訳「あと二十分で、」(353p)、木村訳「あと二十  
分だ。二十分たつと、」(330p)。

- 38、第三ニ機関ノ笛声ヲ合図ニ発砲スヘキ事 第四ニ二分時間ヲ経テ立  
会人ハ戸ヲ開キ二士ノ中孰レニテモ無難ナル方ヲ助け出ス事 (後編  
118p)。

『通俗』「第四 二分時間を経て立会人は戸を開き」(333p)。鈴  
木訳「そして二分の間を置いた後」(360p)。江口訳「それから二  
分たってから」(272p)、田辺訳「それから、二分たったら」(290p)、  
木村訳「それから二分たったら」(271p)。原書 “Puis, après un  
laps de deux minutes.” (244p)、White 訳 “Then after a lapse of

two minutes.”、Towle 訳 “After an interval of two minutes,” (235p)。

- 39、行人ニ触レテ之ヲ倒セトモ顧ルニ違ナク僅ニ三分時間ヲ出テスシテ  
サビルローノ家ニ回り主人ノ室中へ転ビ入りシガ（後編203p）。

『通俗』「僅に三分間をも費さずして佐比児楼なる主人の家に帰り」(421p)。木村訳「三分間で、サヴィル町の邸宅に戻った。」(335p)、江口訳「三分間で、彼はサヴィール＝ロウの邸にもどった」(336p)。鈴木訳「三分でサヴィール＝ロウの家に戻っていた。」(449p)。田辺訳「三分で、彼はサヴィル・ローの屋敷にもどった」(359p)。

- 40、然ラハ其象ヲ見ニコソ参ルベシト云テ頓テ五分時間モ過ケル頃〈中略〉三人ハ早ヤ一軒ノ矮屋ノ側ニ（前編100p）。

『通俗』「『先づ行きて象を見るべし』と云ひて五分も過ぎし頃〈中略〉一軒の小屋に至るに」(104p)。鈴木訳「それから五分後、〈中略〉パスパルトゥの三人は、高い柵の取り巻く囲い地に隣接した、とある小屋の近くについた。」(115p)。江口訳「それから五分の後、」(92p)、木村訳「五分後、」(92p)、田辺訳「五分後に」(100p)。原書 “Cinq minutes plus tard” (75p)、White 訳 “Five minutes later.” (57p)。Towle 本には該当箇所なし。

- 41、八十日間則チ千九百貳拾時間乃チ拾壹万五千貳百分時間已内ニ地球ヲ一周ナシ得ズト云フ人ニ対シ（前編29p）。

『通俗』「十一万五千二百分に世界の一周を回るときは」(31p)。鈴木訳「一九二〇時間で、一一万五二〇〇分で、世界を一周する。」(37p)、江口訳「十一万五千二百分以内」(34p)、木村訳「千九百

二十時間十一万五千二百分だ。」(37p)、田辺訳「十一万五千二百分以内で」(41p)。

例文31から例文33は『新説』と『通俗』で「時順借用」型が使用されている場合である。例文34から例文37では『新説』と『通俗』とで「時順+間」型が使われている。例文38では『新説』と『通俗』の両方で「何分時間」が使用される。『新説』で“un laps”、『通俗』で“a lapse”、あるいは“an interval”の意味が「何分時間」に籠められているのであろう。鈴木訳の「二分の間」の「間」は“un laps”の訳である。例文39では『新説』で「何分時間」が、『通俗』で「何分間」が使用される。これらはともに「間」が付いていることで同型であるが、「何分間」のほうが一般型である。例文40・例文41では『新説』で「間」の付いた時長表現、『通俗』で「時順借用」型である。

以上が「分」単位に見られる、『新説』と『通俗』で対応する時長表現の型の種類である。全体的に言えば、次のようになる。『新説』の前編と後編を合わせた「時順借用」型17例のうち16例が『通俗』でも「時順借用」型で表現される。例外は前編の「二十分」が『通俗』では使用されていないだけである。一方、「時順+間」型では、前編と後編を合わせた16例中、14例が『通俗』でも「間」を付けて時長表現がなされている（例外は、「五分時間」と「十一万五千二百分時間」が『通俗』で「五分」と「十一万五千二百分」になる場合である。）。ただし、『新説』と『通俗』が、「二分時間」と「二三分時間」、「三分時間」と「三分間」、「十五分時間」と「<sup>ママ</sup>二十五分間」の関係であっても、同じ型の時長表現と認めた。そうすると、minutes の場合は「時順借用」型と「時順+間」型が、『新説』と『通俗』とで同じ程度に使用されていることになる。hours の場合は「時

順借用」型よりも「時順+間」型の方が多く使用された。また、『新説』と『通俗』では後者に「時順+間」型が多く使われた。ところが、minutes の場合は、その差がない。さらに、この明治前半期の minutes における「間」の使用を現代と比べると、『新説』と『通俗』で「間」を付ける傾向のあることが認められる。例文35の、『新説』の「十分間ノ時」や、『通俗』の「十分間の時間」はその顕著な例である（「時」や「時間」が余分であるとも言える。）。

現代語訳でも「時順+間」型は使用される。例文33では木村訳だけであるが、「十分間」が使われ、例文34では江口訳のみで「五分間」が使用される。例文36でも江口訳だけに「十分間」、例文39で木村訳と江口訳に「間」が使われる。江口訳に「時順+間」型を多用する傾向がある。例文35では木村訳で「十分間」「十分間」、田辺訳で「十分」「十分」であり、鈴木訳と江口訳では「時長+間」型と「時順借用」型の両用である。原文には「間」の使用についての情報はない。他の例文の場合でも同様である。例文37・例文38・例文40では現代語訳で「時順+間」型が使われることがない。これに対して明治訳では「間」を使用する傾向のあることを認めないわけにはいかない。要するに、hours でも minutes でも、『新説』と『通俗』では「間」を付ける方向にある。ただ、hours については『新説』と『通俗』で差があり、前者では「時順借用」型が多い。何故か。

## (7)

『新／説八十日間世界一周』の時長表現の様態は文体と関係があると私は考える。『新説』は、漢字片仮名交じり文である。このことは既に見てきた例文で分かる。ルビは、前編で皆無、後編ではパラルビで、いくつか



の熟字の漢字音が確認できる。一方、『通／俗八十日間世界一周』が漢字平仮名交じり文であることは、これも例文から明らかである。ルビは漢数字以外の全ての漢字に付いている。

そこで、『新説』と『通俗』の漢字音について比べると、次のような対応が見られる。『新説』の左ルビは省略する。また、『通俗』のルビは省略することがあるのは従前と同じである。

42、疲困シテ斃<sup>タオ</sup>レシカ或ハ競<sup>ケイ</sup>争ヲ断念シタルカ将タ銳意屈セズ誓約ヲ遂ケント海陸ヲ跋涉シテ十二月二十一日八時四十五分ヲ刻シ改進黨ノ会堂ヘ入り来ルベキカト（『新説』後編196p）

43、此の浮世は万事唯だ競<sup>きようさう</sup>争より出来るものなれば若し一度競<sup>きようさう</sup>争を始め<sup>きようさう</sup>て競<sup>きようさう</sup>争を遂げざれば（『通俗』13p）

44、龍動 リヴァプールノ間ハ非常ノ障<sup>シヤウガイ</sup>碍ナキ時ハ五時三十分間ニ通過スルハ固ヨリ難キニアラズト雖トモ奈何セン線上ニ案外ナル障碍アリテ同氏が龍動ヘ回着セル時ハ八時五十分ナリキ（『新説』後編185p）

45、元来龍動「リバプール」の間は非常の障<sup>しやうげ</sup>碍なき時は五時三十分間に通過するは固より難きにあらざれども折悪しく線路に意外の障<sup>しやうげ</sup>碍ありて同氏が龍動に到着せし時は八時五十分なりき（『通俗』403p）

46、今漸ク足ヲ故国ヘ容ル、ヤ否ヤ忽チ同伴警吏ノ誤<sup>ゴシン</sup>認ニ因テ縲紲ノ身トナリ千辛万苦モ終ニ画餅ニ属シ（『新説』後編186p。206ページに「ゴジン」あり。）

47、故郷に帰れば忽ち同伴警吏に誤<sup>ごにん</sup>認<sup>るいせつ</sup>せられて縲紲の身となり今迄嘗し千辛万苦も終に画餅に属し（『通俗』404p）

48、此ヲハマヨリ紐育ノ間ハ轍路五線アリテ運<sup>ウンシユ</sup>輸頗ル便ナリ（『新説』

後編74・75p)

49、「ヲハマ」より <sup>ニューヨーク</sup>紐育の間は <sup>てつだういつすじ</sup>鉄道五線ありて <sup>うんゆ</sup>運輸頗る便なり (『通俗』289p)

50、<sup>ヒキョ</sup>卑怯ニモ教祖ヲカルタジュヘ欺キ招キ (『新説』後編88p)

51、<sup>ヒキョウ</sup>卑怯にも教祖を「カルタジュ」に欺き招きて (『通俗』303p)

『新説』では、例文42の「競争」、例文44の「障碍」、例文46の「誤認」を漢音で読み、例文48の「運輸」を正音で読んでいる。例文50の「卑怯」は「去」に引かれた誤音である。一方、『通俗』では例文43の「競争」、例文45の「障碍」、例文47の「誤認」を呉音で読み、例文49の「運輸」を慣用音で読んでいる。例文51の「卑怯」は正しい読みである。

『新説』では漢音度が高い。<sup>14)</sup> 一方、『通俗』の漢字音は呉音が多く、慣用音が混じる。もっとも、『通俗』でも、<sup>きうせい</sup>救済 (128p)・<sup>ちよげん</sup>助言 (328p)・<sup>はんせい</sup>繁盛 (279p) などの漢音形が使われる。しかし、「上下」は「じやうか」(278p) よりも「じやうげ」が多く (たとえば、18p)、「同行」は「どうかう」(128p) の他に「どうぎやう」(128p)、「書籍」は「しよせき」(292p) の他に「しよじやく」(17p) がある。さらには、「異形」は「いぎやう」(251p)、「助力」は「じよりき」(126p)、「分明」は「ふんみやう」(128p)、「発言」は「はつごん」(418p)・「ほつごん」(285p) など、呉音形が多い。これらの熟字については『新説』に熟字の使用がなかったり、ルビが付いていないなどで、両者を比較することができないが、全般的に『通俗』の漢字音は呉音度が高い。それだけ平易である。『新説』よりも『通俗』のほうが分かりやすい文章であることは上で引用した例文で明らかである。例文44の「リヴァポール」と、例文45の「リバプール」では表記の点で『通俗』のほうが分かりやすい。その他、例文44と例文45に

見える「アラズト雖トモ」と「あらざれども」、「奈何セン」と「折悪しく」、「線上」と「線路」、「回着」と「到着」を比べても、また、例文46の「足ヲ故国へ容ル、ヤ否ヤ忽チ」と例文47の「故郷に帰れば忽ち」、例文48の「轍路五線」と例文49の「鉄道五線」などの対応を見ても、『通俗』のほうが平易である。これに漢字音が加わる。そして、四段活用動詞が「て」に上接した場合、『新説』のほうがどちらかと言えば、音便形が多い。<sup>15)</sup>

このような種々の違いを総合して、『新説』を漢文訓読体、『通俗』を雅俗折衷体と大別するならば、文体の違いの中に、時長表現の相違を位置づけることが可能である。<sup>16)</sup>

これらの文体的要素の異なりの中で、hours の場合、幕末以後、使用されて来た、それゆえに伝統的な、したがって、格調高いと認識されたに違いない「時順借用」型が『新説』で選択されることが多かったのである。同じ文体でもルビを付ける姿勢は「時順+間」型を選択させる要因になった。「二十四時間」や「数時間」が『新説』の後編に多いのはその現れである。その方向に大きく傾いたのが『通俗』の時長表現である。それを徹底した前途に現代の hours の表現が位置する。

それでは、minutes の場合はどうか。hours と minutes には大きな違いがある。minutes の場合は、時順表現に「間」を添えなければ、時長表現と混同されることは極めて少ない。「10分」や「20分」が、これだけで時順を表すことは稀である。「10分」を例にとると、これが時順表現をするのは、「地震があったのは9時何分でしたか」に対する応答という限定的な環境においてである。「時」<sup>ジ</sup>単位の時刻が先触れされているときに限る。そのため、minutes にとって「間」の必要度が低い。しかし、幕末から明治初期にかけて、時長に「間」を付ける傾向が生じた。そして、

hours の場合はそれが徹底する方向に進んだが、minutes の場合はある程度で止まった。現代に近づくとつれて、むしろ後戻りし、「分」単位の時長に「間」を付けることが少なくなり、時長であることを強調する場合に特に「間」を使用する方向に進んだ。その先に現代の minutes の表現がある。それが、例文35から例文37・例文38などに現れている。もっとも、現代語においても、「時順借用」型を選ぶか、「時順+間」型を選択するかは、時順意識の程度、文脈、また、文体や意味によるので一様ではない。作家の好みもある。

「2時間34分」のごとき、「何時間」と「何分間」の minutes の場合も、限定的な環境における表現である。hours が前に示されている。前述のごとく時長表現に、初めは時順表現の「何時何分」が借用され、後に時長表現であることを明確にするために「間」を付ける「何時何分間」の表現が作られた。ところが、一方で hours には必ず「間」を付ける慣行が出来上がると、「何時何分間」から「何時間何分間」が生まれる。ところが、「何時間」の後の「何分」（や「何秒」）は、「何時間」で時長表現であることが示されているのであるから、「間」を付ける必要度が、単独の minutes の表現以上に減少し、結局、「何時間何分間」は廃れ、「何時間何分」に落ち着いた。minutes が直前の「何時間」の制約を受けたのである（minutes の後の seconds の場合も同様である。「何分何秒」の「何分」が、その前に「何時」がなく単独で時順を表すことは極めて稀である。その限定のなかにあるから「何秒」には「間」が不要なのである。）。

# (8)

『新説』と『通俗』は翻訳小説であるから、日本語の表現は間接的な位

置にある。また、異なった文体で書かれている。『新説』は前編と後編で多少、文体に違いがある。その後編の文体の影響を『通俗』は後半部で受けている。したがって、両書の《時》表現をそれぞれの成立した時期の、現実の《時》表現と受け取ることのできない面がある。両書の日本語は複雑な性格を有している。しかし、これらのことを配慮して対応すれば、両書のそれぞれにおいて、また両書の関係の中に当時の《時》表現の実態、そして推移の方向を読み取ることが許されるであろう。

時長表現の多様化は、時長表現に「何時」、または「何時何分」、あるいは「何分」、「何秒」などの時順表現を借用して行ったことから始まる。時順表現と時長表現が同一語形で表される不分明で混乱しやすい状態からの脱却として「時順+間」型の時長表現が展開した。それは、オランダ語の《時》表現との決別であり、また、日本語の分化、合理化であった。そして、「時間」や「期間」など、時長を表す単語群に先立つ同質の表現の成立であった。

#### 〔付記〕

本稿は、本学で開催された第86回 国語語彙史研究会（平成19年・2007年10月19日）における口頭発表の一部である。発表後、東郷吉男氏より時刻表示は現在でも混乱しているとのこと指摘があった。

#### 注

- 1) 国会図書館本による。第1巻の奥付は「明治十二年十二月二十四日版權免許」「明治十三年第十月出版」「訳述人 井上勤」「出版人 黒瀬勉二」「発売人 三木美記／時習舎／書籍会社」「売弘 各書林」、第10巻の出版初兌は「明治十四年三月」である。なお、明治14年3月出版発兌の1本が『井上 勤集』（「明治翻訳文

- 学集【翻訳家編】」所収。ナダ出版センター刊）に複製で収録されている。
- 2) 次の重訳本による。Louis Mercier and Eleanor E. King 英訳、1873年、London 刊。
- 3) 奥付は「明治十九年八月九日版權免許・明治十九年九月出版発兌・明治二十一年十二月四日印刷発兌」「訳述者 井上<sup>(ママ)</sup>努」「発行者 大川錠吉」「印刷者 滝川三代太郎」「発兌 大川屋」。本書には、「東京自由閣発兌」〔表紙による〕、「発兌元 自由閣」〔奥付による〕とある一本もある（凡例なし）。
- 4) 『太陽コーパス雑誌『太陽』日本語データベース』（独立行政法人国立国語研究所編、平成17年・2005年3月、博文館新社刊）。
- 5) 松井利彦「異文化接触によって起こる言語表現の模索・混乱と調整—《時》表現の消長を中心に—」（アジア文化交流研究センター 第7回研究集会・漢字文化圏近代語研究会 第6回国際シンポジウム「漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成創出と共有」、2007年7月28日）の発表資料。
- 6) 1926年・大正15年10月、1969年・昭和44年2月刊。ちくま文庫本8巻247p。
- 7) 本稿では「名著復刻全集 近代文学館」本により、必要により架蔵本を使用した。後編も同じ。
- 8) “Jules Verne Works” に収録されている “The Tour of the World in Eighty Days” を使用した。架蔵の “Jules Verne Works” は “Fancy of Doctor OX” “The Tour of the World in Eighty Days” “A Journey to the Centre of the Earth”（以上は Stephen W. White の訳）と、“A Winter’s Sojourn in the Ice”（これは William Struthers 訳）の4作を収録した作品集である。どの作品にも、“The Evening Telegraph” のために “Translated Expressly for”、そして、同社から1874年に刊行したとある。philadelphia にある、この新聞社は1874年の夕刊にジュール・ヴェルヌの種々の作品を英訳、掲載し、それらを纏めて1冊の本にしたのであろう。
- 9) 柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』（昭和36年・1961年九月、春秋社刊）、川島瑞恵『我が祖父川島忠之助の生涯』（平成19年・2007年7月、皓星社刊）も参照した。
- 10) 国会図書館本によるが、表紙は架蔵本による。なお、国会図書館蔵本には落丁がある。232ページから238ページの欠落部分は架蔵本で補った。
- 11) 『新／説八十日間世界一周』と『通／俗八十日間世界一周』を使用した論文に斎藤文俊「明治期における『八十日間世界一周』の翻訳二種」（『東京大学国語研究室／創設百周年記念国語研究論集』所収）がある。

- 12) 岩波文庫本（1978年10月第1刷、1993年10月第11刷）による。なお、『米欧回覧実記』の「何分時」については、拙稿「《時》表現の近代化」（『和漢語文研究 第4号』平成18年・2006年11月刊）、「明治初期の《時》の表現—『米欧回覧実記』の時順と時長の表現を中心に—」（『国語語彙史の研究 26』平成19年・2007年3月、和泉書院刊）。
- 13) 岩波文庫本による。『米欧回覧実記』の「何秒時間」については、拙稿「《時》表現の近代化」、「明治初期の《時》の表現—『米欧回覧実記』の時順と時長の表現を中心に—」。
- 14) 拙稿「文体要素としての漢字音」（『国語と国文学 948号』、平成14年・2002年11月）。
- 15) 漢字音と、四段動詞連用形の音便との関係については、拙稿「明治前半期の文体要素」（『文林 第35号』、平成13年・2001年3月）、前掲「文体要素としての漢字音」。
- 16) 法律文における「時順借用」型と「時順+間」型との関係については拙稿「近代日本語における「時」の獲得—新漢語「時間」と「時期」の成立をめぐって—」（『或問 9号』、平成17年・2005年5月、近代東西言語文化接触研究会刊）。

#### 【関連文献】

1. 石井研堂『明治事物起原』（大正15年・1926年10月、昭和44年・1969年2月刊）
2. 橋本万平『日本の時刻制度』（昭和41年・1966年9月、塙書房刊）
3. 松井利彦「近代漢語の伝播の一面」（『広島女子大学文学部紀要 14号』、昭和54年・1979年3月、広島女子大学文学部刊）
4. 佐藤喜代治「『提綱答古知幾』の語彙」（『国語学 123号』、昭和55年・1980年12月刊）。『漢語漢字の研究』（平成10年・1998年5月、明治書院刊）
5. 岡田芳朗『明治改暦【「時」の文明開化】』（平成6年・1994年6月、大修館書店刊）
6. 成沢 光『現代日本の社会秩序』（平成9年・1997年11月第1刷、平成11年・2000年6月第3刷、岩波書店刊）
7. 橋本毅彦・栗山茂久『遅刻の誕生』（平成13年・2001年8月、三元社刊）
8. 飛田良文『明治生まれの日本語』（平成14年・2002年5月、淡交社刊）
9. 松井利彦「近代日本語における「時」の獲得—新漢語「時間」と「時期」の成立をめぐって—」（『或問 9号』、平成17年・2005年5月、近代東西言語文化接触研究会刊）

10. 松井利彦「近代語における《時》表示法の位相」(『文林 40号』、平成18年・2006年3月、神戸松蔭女子学院大学学術研究会刊)
11. 松井利彦「《時》表現の近代化」(『和漢語文研究 4号』、平成18年・2006年11月、京都府立大学国中文学会刊)
12. 松井利彦「新漢語『時間』の成立と《時》の表示法」(『近代語研究 13集』、平成19年・2007年12月、武蔵野書院刊)
13. 松井利彦「明治初期の時の表現」(『国語語彙史の研究 26』、平成19年・2007年3月、和泉書院刊)
14. 久島 茂 『はかり方の日本語』(平成19年・2007年3月、筑摩書房刊)
15. 松井利彦「異文化接触によって起こる言語表現の模索・混乱と調整―《時》表現の消長を中心に―」(アジア文化交流研究センター 第7回研究集会・漢字文化圏近代語研究会 第6回国際シンポジウム「漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成 創出と共有」、2007年7月28日) 発表資料。